



夢話・弐



銀色の雌犬の話

大城拓人

Published by Takuto Oshiro  
Copyright © 2010 Takuto Oshiro All right reserved.

## 銀色の雌犬の話

こんな夢を見ました。

昼か夜かも解らない、浅い闇。ひび割れた緩い地盤、終わりの見えない群発地震。

モンスター級のトラックが忙しく幾台も奔り、細かい埃が舞い、実体のない乾いた空気が漂う、引越す前の懐かしの近所。

黒と赤の流線。

近くで、または遠くで、こめかみを突き刺すようなサイレンの音が聞こえる。

俺は美しい銀色の犬と共に駆けている。

俺の犬だ。昔、飼っていた雌犬だ。小学校低学年の時、マンガオタクのタカイという、薬局の倅から譲り受けた。

実はこの犬、老衰で死んでしまったはずだが、眼の前の彼女はどうも若々しい。

名前は、……何だったけか？ 何故、どうして、思い出せない？

だが、俺と彼女は休むことなく、不安定な基盤の上に成り立ったアスファルトを蹴り、流れる闇の中を進んでいる。

プリマー喘息という、世にも酷い喘息を先天的に患っている俺は、呼吸が細い故にいつも背中を丸めていた。

こういう哀れな俺の姿を、心の隅で馬鹿していた輩は大勢いた。

テレビにも出ている、この街の人気者の自治会長もその一人だった。

そして俺は、遂今しがた、そいつを刺殺したところだった。

出来れば、殺したくはなかった、出来れば心穏やかに話し合いたかった。ただ、過去からの非礼を詫びさせたかった

。

小学校の同窓会の帰り、つまり俺はそういう為に、自治会長宅に出向き、わざわざ会いに行ったのだった。

けれどヤツは尚も俺を馬鹿にするばかりか、俺の母親の秘密まで口にしがった。

俺を産んだことを後悔していやがった、ロクでもない母親の、おぞましい男性遍歴だ。

ヤツの口から吐き出る言葉を聞けば聞く程、俺は増々頭に血が上った。

誰がお前なんか謝るかよ。お前は出来損ないだ。お前なんか直ぐに抹消出来る、お前なんか私という偉大な存在に比べれば、取るに足りない人間だ。お前は生まれ付き、そうなんだよ。私のいう意味が、理解出来るか？ 生まれて来たことすら烏滸がましいのだ、この世間知らずの出来損ないめ。ししゃもでも喰ってろ！

怒りというものの本質を、俺は理解したのだった。

……はあ！

俺は、何てことをしてしまったんだろう！

いくら何でも、殺すことはないじゃないか！

後悔させてやろう、俺を馬鹿にしたヤツを、ちょっとだけ後悔させてやろう、ただそう思っただけなのに！

恐ろしい、何と、恐ろしい、何て恐ろしくて馬鹿げたことを俺はしてしまったんだ！

サイレンの音が街を包んでいる。俺を追っていることは間違いない、不快極まる音だ。

走り疲れ果てた俺達は、シャッターの閉まったチーズ屋の前で崩れるように腰を下ろした。

誰か、俺が自治会長を殺した現場を見ていたのだろうか？ 誰かが通報したとしか考えられない。余りにも、警察どもの対応が速過ぎる、と思った。

プリマー喘息の発作が出る。

そんな俺を心配してか、犬は俺の顔を舐めた。俺は犬の頭を撫でた。さらさらと、この上ない程、太陽を感じる気持ちの良い毛並みだ。

そう、この肌触りだ、懐かしい。

凧らずとも俺は泣きそうになった。

肩で息をし、嘔吐を繰り返し、震えた指で、俺はポケットから薬を探した。

薬はあることにはあったが、その粉薬が入った袋は、もう既に一袋しかなかった。

つまり、それが俺の命の残量であった。

目視出来る、生命の砂時計だった。

プリマー喘息はただの喘息ではない。母親もこれで死んだ。亡き母親の呪いともいえる。

この薬を飲み、この薬の効能が切れれば、後、俺は死を待つだけだった。

半笑いを浮かべ、苦みを堪えて俺は薬を飲み干した。

水がなく、粉が口の中に張り付いたが、構わなかった。

徐々に発作が落ち着いた。

そこに先程同窓会で別れたばかりのタカイが俺達の前に現れた。

これは何という幸運か、と俺は思った。

タカイの実家は、そうだ、薬局だ。

もしかしたらプリマー喘息の特効薬を持っているかも知れない。もしかしたら、俺を匿ってくれるかも知れない。

淡いが、だが確固たる期待を込めて、俺はタカイの手を握ろうとした。

刹那、白銀の光と共に、犬がタカイの右手に噛み付いた。

絶叫するタカイ。地面に黒鉄の拳銃が落ちた。

おい、どうした、とガチガチに制服を着込んだ警官達が続々とやって来た。

即座に、警官の一人が犬の頭を撃ち抜いた。

犬の脳が辺りに飛び散り、銃弾の雨が俺を襲い、俺は気付くのがむしゃらに駆け出していた。

タカイは自治会長の信者だ、そうだ、すっかり忘れていた。自治会長ラヴ、あいつは自治会長の寵愛を、一身に受けていたじゃないか！

これからも、あいつは警官に混じって俺を殺しに来る。間違いない！ つまり、だから、こういう憎しみの連鎖があるから、殺しは良くないんだ！

ごめん、犬、ごめん、本当にごめん！

普段なら薬の効能が一番顕われている時間にも関わらず、発作が襲って来た。

咳と胃酸、涙を俺は流し、止めどなくぶちまけた。

左肩に一発、被弾していた。

今度は痛みの為に泣いた。

走りに走り、実家に辿り着くと倉庫の中に逃げ込み、扉を閉め、俺は呼吸を落ち着かせると同時に息を殺した。

無理に体を動かしたせいで、また怪我のせいで、いつもよりずっと早く、薬の効果が切れそうだった。

今までの感覚からして、もってあと五十分、といったところだった。

血が止まらない。

とにかく左肩を押さえ、倉庫の扉の隙間から、俺は外の様子を覗き見た。  
多くの警官と自治会長の信者達が血眼で、口から耳から変な液体を垂れ流しながら俺を探していた。  
奴らを指揮しているのはタカイだった。  
タカイは金色の雲に乗って遥か上空から無数の糸を垂らし、奴らをマリオネットのように操作していた。  
これがタカイの望んだ世界かと直感した。  
タカイは何があっても、本気で俺を殺したいようだった。  
鈍いようで鋭利な、圧倒的な殺意が、僅かな隙間から風に乗って痛みをもって伝わって来る。

だが、いいか。俺も犬を、愛すべき犬を、奴らに殺されているのだ。  
タカイのわがままだけ赦す訳にはいかない。  
俺を殺したいのなら、いいだろう、俺もタカイを殺そう。  
タカイからしてみても、俺が発作で死ぬのは本望ではないはずだ。  
受けて立とう。俺の生命がまだある内に、ケリを着けるとしよう。  
それで憎しみの連鎖に終止符を打つのだ。

俺は周囲を見渡し、砂利の摩擦で良く研ぎ澄まされたシャベルを手にとると、「めっさぼーん」、と体中の筋肉を1000パーセント以上に緊張させた。  
手に取るよう、みるみると寿命が急速に縮んでいるのが解る。だが、構わない。  
左肩から流れ出ていた血が止まった。  
俺は倉庫の扉を勢い良く開けた。  
正に、己のものとは思えない雄叫びを上げて、俺は警官と信者達の群に突っ込んだ。  
五分だ、どう考えても、せいぜいあと五分しか、この状態は保たない。  
しかしそれで充分だ。  
タカイを殺すには、それは充分過ぎる時間だった。

小学校の時。いわば、俺とタカイは気が合った。  
互いにクラスのはみ出し者で、休み時間になれば教室の隅でマンガをひっそりと読み合った。  
思考パターン、価値観が似ていたと思う。  
だが、それはあくまで小学校低学年の時までの話だ。  
タカイ、お前に価値基準というものはあるか？  
自分はあるか？ 自分を築いて来たか？  
容易く、あんな自治会長に心酔しやがって……！

走って来る俺に向かって、警官達は一齐に発砲した。  
銃弾が頬をかすめ、肩や脚にめり込んでも、鋼になった筋肉でそれらの全て弾き飛ばした。  
加えて多くの銃弾をシャベルで弾きつつ、俺はひたすらに突き進んだ。  
刃物宛らになったシャベルのへらで、次から次へと俺は傀儡人形どもの首筋を掻き切った。  
ある者は俺の髪を引っ張り、ある者は俺の右腕に噛み付いたが、怯むことなく、俺はそんな奴らの腕を切り落とし、心臓を突き刺した。  
後悔はなかった。こいつらを最早人間だと思う訳には到底、いかなかった。  
やらなきゃ俺がやられる、真理はただそれだけだった。  
奴らの唾液には特殊の科学物質が含まれているらしく、噛まれた右腕の部分がプリズムの煙を出し、溶け出していた。  
。 全身に廻ってはマズい、と思い、俺はシャベルを左手に持ち替え、肩からぱっさりとその右腕をそぎ落とした。  
痛み？  
ある、大いに、ある。あるに決まっている。

だが、痛みなぞに構っている時間はなかった。

「何すんだよお！」、と雲の上からタカイは叫んだ。

奴の頼れる人形達は、今や一人残らず死滅していた。

突如タカイは掌を俺に向け、「は一！」、とそこから光線を出した。

皮膚を挽ぐような熱風が俺の顔に直撃し、素早く左腕で顔を覆い、身を翻した。

程なく、五感を上げ潰すような爆音、爆風、衝撃波、が俺の周囲に巻き起こった。

薄目を開けると、分厚いカーテン状になった砂埃が俺の四方を囲い、舞い上がっていた。地面に細々と、警官、信者達の身体の部位が千切れ飛んでいた。

煙の向こうに、よれよれと俺に背を向け退散するタカイの姿が視えた。

一気に冷たく、熱い痛みが俺の全身を駆け抜けた。

右肩から滝の如く、血が流れ、いや、全身から血が噴き出て来た。

「めっさぼーん」、と呟いても何も力がでない。声すら出ない。

俺の身体は限界に来ていた。

それでも、俺は歯を食いしばり、鼻血を出してシャベルをタカイに投げ付けた。

シャベルはタカイの胸に突き刺さった。

タカイは雲から転げ落ち、無惨にも跡形もなく、アスファルトの上に潰れた。

寂しそうに、雲は血溜まりとなった主人の上をぐるぐる回るも、そこに突っ込んで来たモンスター級トラックに轢かれ、ただの煙となって消し飛んだ。

血に染まり、真っ黒になった俺はそのまま地面に倒れ込んだ。

血は止まらない。一向に、筋肉は萎む。痛みはなく、むしろ暖かい。安らかな気持ちになる。

ああ、死ぬんだな、と俺は思った。

先のトラックが、俺の直ぐ傍に停まった。

エンジンの音が止み、運転席のドアが開いた。

俺は眼を見張った。

掠れ掛かった俺の視界に映ったもの、運転席から降り、地に着いたそれは、どこか、見覚えのある銀色の脚だった。

人間の脚ではない、間違いない、犬の、俺の飼い犬の、脚！

銀色の雌犬は二足歩行で臥す俺に近付いた。

冷たい、尖った眼で、俺を見下ろし、嗤った。

その眼、その口、その顔付は、.....何ということだろう、ていうか、何で気が付かなかったんだろう、俺の母親、そのものだ！

この雌犬のガキめが！

自治会長の引き攀った笑い声。それが俺の耳の最奥に届した。

「合格よ」、雌犬、.....いや、母親は言った。

「合格よ、あなた。おめでとう。これなら充分、通用する」

は！ 俺は声にならない声で叫び上げた。

通用、合格？ 一体、何を言ってるんだ、あんたは？

「いやあ、ねえ」、そう母親は言い、白銀に輝く両腕を天に向かって突き上げた。

「人型細菌兵器の実験に決まってるじゃない。そんなことも忘れちゃったの？ お莫迦さん」

トラックが宙に浮き、無数のパーツに分解した。そして母親の身体にくっ付き、融合した。

瞬く間に三メートルを超えるロボットになった。

鳩尾の辺りに、母親の顔が突き出て、相変わらずの陰湿な笑みを浮かべた。

即座にロボットは俺の身体を驚掴みした。

太い指を伸ばし、俺の額を軽く突いた。

幾つもの映像が俺の眼の奥を巡った。何もかも、俺は理解した。

潤った声を、母親は響かせた。

「どう？ 思い出したかな？」

俺は涙し、頷いた。声を絞り出した。

「かあさん」

敵国の首都に潜入し、プリマー菌をばらまく使命を持った兵器。それが俺だった。

ただあらゆる場合に備えて、正体をばらさずに、単独でも敵兵を倒せる程の格闘術を備えていなくてはならない。

故に今回のような実験が必要だったのだ。

眼の前の「母親」は、つまり、俺の生みの親、俺を造った博士だった。

「祖国の為に！」

「母親」は言った。

「これから、あなたはに存分に働いてもらわなくっちゃね。さあ、ログアウトしましょう、実験は終わりよ」

「イヤだ！」

俺は叫んだ。お前らの為になんか、俺は働きたくない。俺はただ同窓会に呼ばれて、仲間に会う為に、ここに帰って来たんだ、それだけだ！

勝手なことを言うな！ お前も、タカイも、自治会長も、皆が皆、勝手過ぎる！

大地が揺れた。

風が、空気の流れが止まった。

ポジとネガをひっくり返すような、低い音が位置もなく空間という空間に響き渡り、建物が次々と沈んで行った。

地震だ、地震が来たのだ。

「母親」の立っているアスファルトの大地にも亀裂が走り、声も、奏でる音もなく、俺と「母親」は闇に呑み込まれて行った。

落下して行く。

どこまでも落ちて行く。

果たして俺は、いや俺達は生きているのか、死んでいるのか、どうなのか。

わからない。

救いを求め、眼を開けた。

卑猥な母親の笑みがそこにあり、考えるより速く、俺はその鼻先に鉄拳を喰らわせてやった。

もう近くのものとは視たくない、遠くのものを見ようと、自分達の進路上にある、遥かなる、黒色、に眼を遣った。

実に、質量が詰まっていそうな、黒色、だった。

だが、俺は気付いて笑ってしまった。軽く咳き込んだ。

そこには昼か夜かも解らない、浅い闇が、ただ単純に広がっていたからだ。

結局のところ、俺は飼い犬の名前を思い出せなかった。

(終)